

Title	社会思想家としてのジョン・ラスキンの生涯 (四)
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.4 (1923. 4) ,p.602(106)- 622(126)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230401-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

a biography, pp. 72-73; J. S. Mill, Autobiography, pp. 54-56; W. L. Courtney, Life of J. S. Mill, p. 15. を併せ讀むと面白う)。Bentham は非常に温厚な人物であつて、常に Mill 兄弟を可愛つた。Bentham と James Mill とは極めて親密であつたから、兩人は相談して長子の John を教育することになつたのであると云ふ。話は Carlyle にも及んで、彼は獅子狩に臨んだ婦人のやうな恐怖を抱いて居る等と語合つた。(ibid, p. 85)

翌四月十四日の夕刻 John Stuart Mill は、勤務先東印度會社の招致に接して、倫敦に歸つた。此日の日記に Caroline Fox 女史は、女史の Mill 觀を書いて居るが、夫れは次號に譲ることゝする。

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯 (四)

奥井復太郎

一四

ラスキンのオクスフォード生活に就いて直に吾々の頭に浮ぶものは、家庭以外には何等交渉を有せず、人との交際の方法さへ辨まへない彼が多く、比較的世間慣れた學生の間に初めて投せられた、其時の彼の姿である。(學校生活に就いては既に Thomas Dale の經營せる學校に入つた事を述べたが其處に於ける彼と學友との交渉に就いては Praeteria, I, § 92 参照) 附近の交渉の殊に少なかつた郊外の家に、僧庵的に世間とは隔離せられた生活から今や離されて新たに放り込まれた社會は彼とは全然絶縁した

兩極であつたに相違なく、従つて其處に於ける彼の地位は極めて絶望に近いものであつたであらう。(E. T. Cook-The Life of Ruskin, vol. I, p. 53)

既に彼自身の覺悟してゐた如くに、朋友から受ける嘲弄は何人も、想像する所である。(Praeteria, I, § 215) 併しかゝる世間慣れない青年に對して更に不利益な事情があつた、それはオクスフォード入學と云ふ事がラスキンをして今や彼の力一つで世間を渡つて行かせる機會となつたにも拘らず彼の母が遠く離れ住む事の懸念からオクスフォードの High Street に居を構へて彼の面倒を見ようとした事である。オクスフォードの學生にとつては親が一緒に來ると云ふ事が珍らしい事であつたが更に此の事は彼の年頃の青年が極めて嫌がる『親の面倒を受けてゐる』と云ふ非難を彼に蒙らせる事になつた。

(Cr. Ada Earland—Ruskin and his circle, p. 37) 彼の母が彼についてオクスフォードに來た理由を彼は自敘傳の中に説明してゐる。

『讀者は、私の母が私と離れる事が出來ない爲めや又は私を信用してゐなかつたと云ふ様な理由でオクスフォードに行つたのではない事を知つて戴きたい。母は何か事の起つた場合や又急病などの時に手近に居ない爲めに行つたのである。母は常に私のお醫者であり又看護人であつた。屢々時を得た母の注意が最も重大な危険から私を逃がれさせて呉れた。此の場合にも母の此の氣遣は、後に知る如くに後で起つた事件によつて是認せらるゝ事になつた』(Praeteria, I, § 226)

ラスキンは夕方からトムの鐘が鳴るまでを毎日 High Street の母の下で過し其の日の出來事などを語り合ふた。彼の父は土曜日此の地に

來て日曜日の朝は St. Peter の教會に三人で昔の様に禮拜に出かけた。此の以外には彼の兩親は彼の友人の嗤笑を恐れて彼と共に公の場所に出なかつた。(Cf. Praeterita, I, §§ 226, 227)

ラスキン自身は母親がオクスフォード迄ついで來た事に就いてそは何等學友の嘲弄の原因にならなかつたと述べてゐる(Praeterita, I, § 226) Ada Earland は此の理由をラスキンの友人となり學校中でも勢力のあつた Henry Acland の力或はラスキンが兩親に對する感動すべき孝心が思慮なき者をも沈黙せしめ得たかの二點に歸してゐる。ラスキンが極めて人を惹きつける魅力を持つた人であつた事も或は其の一理由であらう。(Cf. Ada Earland - Ruskin and his circle, pp. 39-40.)

更に Wingate はラスキンのオクスフォード入學の時期に就いて次の様な觀察を下してゐる

地位の傳統に於ける間隔をラスキン程痛切に感じた者はない。輕蔑的な冷淡と云ふ態度が彼に對してとられた一般の風である。時には、例へば彼が一行四字、十二行を越えた朗讀に耐へうる小論文を書いて gentleman-commoner の不文律を破つた様な場合には其が更に積極的な形式に現はれた。終生の交友の發端であつた Henry Wentworth Acland との最初の面識もラスキンは又彼に加へられたある亂暴に負ふのである。』(註) (Ada Earland, Ibid., p. 38.)

註 此の點に關して詳しくは Cook, - The Life of Ruskin, vol. I, pp. 54-56 を参照せよ。右に掲げた小論文の挿話並びにラスキンが教師を當惑させた話に就いては Praeterita, I, § 222. 以下に彼の記述がある。Henry Acland への知り合ひに就いては Ibid., § 224. 参照

H. T. Cook 氏は他の學友がラスキンを默許してゐる貌であると述べてゐる、が兎に角ラスキンの存在はオクスフォード學生中に可なり變つ

『Hilary』の學期に於いて學校に入る新入生は、確に彼と同じ様な立場に居る者が多勢である所の Michaelmas の學期に入學する者に較べてより一層不愉快な好奇心を引き惹き惹きしめるに至るといふ事をラスキンは氣が附なかつた様に思へる』(John Ruskin, p. 25.)

『社會上の地位の相違は其の當時、今日よりも甚しかつた、ラスキンと學校の人々の社會的相違は又彼の質朴な家族と一緒に居ると云ふ事によつて更に擴大された、此の事は外面には現はされてゐないが内心に感じてゐたに相違ない。彼はよろこんで彼の款待を受けに来る者には良い葡萄酒を與へ、彼の父は惜氣なくラスキンの持つて來る勘定書に對して支拂をした——金銭上の關係では故に彼は他の新入生の多數よりも恐らく遙かに有福であり得る——併し葡萄酒商人の子と貴族社會の公達との間に横はる社會的

た色彩を示した事は事實である。たゞ彼は他の者が彼に對して冷淡であつたと同様に他に對して融合して行く態度を示さずに自身の路を拓いて行つた。彼自からは次の如く云ふ。

『此の時から——即ち私が住ふ様になつて以來三週間の後には——頓間で腰抜けではあるが私は機に臨んで自分自身を保つて行く事が出来ると思はうに至つた』(Praeterita, I, § 236)

『二年目には學校に於ける私の地位はかく等しく愉快なものであり又兩親を満足した様に秀れたものでもあつたとして私は Christ-Church society に異議なく加へられた』(Ibid., § 236)

ラスキンのオクスフォード時代は一八三七年から同四〇年(或は三九年と云つても差支ないが)に互る期間を其の中心とするが、彼の生活の興味或は勞作は四つの方面に集中されてゐるのを區別する事が出来る。第一は勿論彼の學校

生活又は課業の方面であるが第二の點は學校に於ける懸賞詩作、第三の方面は彼の進む可き獨特の方向であり第四は彼の戀愛を中心とするものである。第二の點は三七、三八、三九年の三回に亘る Newdigate の懸賞詩作にして第三の點は主として三七より二八年を中心とする散文に現はれ、第四は三八年 Adèle Domecq の再訪を中心とする事件と之れに關する彼の詩作の方面である。

ラスキンの評傳中詳細を極め大冊を爲すもの E. T. Cook 氏の其れの如きに於いては此のオクスフォード時代を記するに當つて年代を追ふ事は事件を徒らに紛糾せしむるのみで効果を擧げ得ない。従つて年代を追ふよりも生活の中心興味を主題として記述するの當を得てゐるは云ふ迄でもない。E. T. Cook 氏のラスキン評傳は此の傾向をとる筆者も大體に於いて此の方針

を採る者である。

オクスフォードに於ける學課に就いてはラスキン自から簡単に其の自敘傳第一卷二二七節以下に述べてゐる。既に Wingate の云へるが如く、科學者の觀察力と藝術家的氣質とを具へたラスキンにとつては比較的に興味の薄い學課に其の注意力を集中させるのは極めて困難であつた。ラスキン自から一日六時間を一生懸命勉學に費したと述べてゐる (Præterita, I, § 227) F. Harrison はラスキンの此の學業に對する態度を認めて彼の勉學を説いてゐる (Cf. John Ruskin, p. 3536. 其處に引用されてゐる Thucydides の研究に就いては Præterita, I, § 237)

以下大體に於いて彼の羅典、希臘等の古典研究に對する態度を述べるに止めよう。

ラスキンの羅典語は大學中最惡のものであつたと自から云つてゐる。(自敘傳第一卷二二二〇

節) Plato は初めの読み出しから面白く感じたが Aristotle に對しては左程惹れなかつた。彼の用ひた Ethics 及び Rhetorics は今日大英博物館の圖書館に藏せられてゐるが此の二冊は文法上又は哲學上のノートに用ひられたよりは、寧ろ建築畫を描く、餘白として用ひられた様に思はれる。更に彼の研究中 Tacitus, Terence, Lucretius, Juvenal 等の名を擧げる事が出来る。希臘古典に關しては Homer, Sophocles, Euripides 等を擧げる事が出来、更に Aristophanes に至つてはラスキンの最も愛好せる内の一人であつて彼自から其の政治思想に於いて此の詩人に負ふ所多き旨を明記してゐる (註) Herodotus, Thucydides 等もラスキンの興味を唆つたものと考へられる (Herodotus に就いては Præterita, I, § 228. Thucydides に關しては Ibid., § 237. Cf. Cook—The Life, pp. 62-63)

註 Aristophanes より受けた政治思想の方面に於ける影響は、自敘傳中に殆ど言及する所ないが Library edition, vol. xxxv の末尾に附加せられたる Præterita 稿本中に發見せられる (Præterita, I, § 237 Thucydides の條に續くもの) 其處には Herodotus, Aristophanes, Plato 其他に關する所論を見るがラスキンは同所で『私の政治思想の一般的色調や形體に就いては現在の又は過去の、何づれの論客よりも一層深く Aristophanes に負ふ所が多い』と述べてゐる。

前記の羅典希臘の古典に關するラスキンの態度は大部分、自敘傳中よりも寧ろこの稿本中に多く發見せられるものである (此の條に關しては上記 Library edition, xxxv, p. 60 参照)

ラスキンの著作を通じての一特徴である古典的知識の豊富を根據として、オクスフォード時代に於けるラスキンの古典研究が彼の自敘傳に於いて説く所と實際に於いて相違し、是等の記録以上に充分なるものがあつたと考ふる傳記記者に對して E. T. Cook 氏は何等その根據とすべきものが無く、ラスキンの古典的知識はオクスフォード在學中よりも其の後の研究に負ふも

のである事を主張してゐる(The Life of Ruskin, vol. I, p. 63. and Note 1)

『若し彼が哲學的意味に於ける學者でないとしても、彼は問題の核心を彼自身のものとなし得た。彼は最も、古典文學の大部分を同化してゐた。既に The Poet of Architecture に於けるが如く、其の後の Modern Painters の第一卷に於いて彼の古典學上の引喩が自由自在に生々としてゐる事は驚く可きものがある。彼自ら「オクスフォード卒業生」と記載せる事は、彼の第一卷の内容の大部分によつて確證されてゐる。彼の論證の方法——到る處で特殊の事實から發足して行く方法——は最初からアリストートルの影響を示す。彼の緻密なる分類、細分又は傍註の梗概等は、ロッキングを懐かしむるものであるがロッキングの Essay on the Human Understanding は此の第一卷の初めの方の請章に於いて屢々引用されてゐるものである』(Library edition, vol. III, p. xix) 更に詳しくは Collingwood - Life and Work, vol. I, pp. 109-111 參照

Collingwood によれば、大體に於いてラスキンの自から述べたる所を記述せるに過ぎないが、オクスフォードの古典研究は其の思想的方面に於いて其の影響が著しいのである。

Life of Ruskin, vol. I, chap. III & IV 參照) 彼がオクスフォードで得た友人知己に就いて云へば、前記の Henry Acland の外に Dr. Buclan, Charles Newton, Osborne Gordon, Walter Brown, Dean Liddell 等を擧げる事が出来るが其の中でも Acland を得た事はラスキンの一大幸福であると共にオクスフォードの學校生活が齎した最大の利益と云へよう。(Cf. Collingwood, op. cit., pp. 81-82) Ada Earland によれば『ラスキンは之れ以上の良顧問を得る事は出来なかつたであらう』(Ruskin and his circle, p. 39) 此の兩者の間には一方に於ける保護的友情と他方からの、情の深い交感とが結合して其の交友は遂に終世變る事がなかつた。(註) (Cf. Cook - The Life, vol. I, p. 79)

註 是等の友人、知己の外に Edward Clayton はラスキンの Letters to a College Friend の宛名人である。此の書翰

『彼は古典學の細かい點に於いては常に不得手であつた、併し彼は自分の讀んだ書物——Herodotus & Thucydides 悲劇作者や Aristophanes 更に Plato, Aristotle のものを加へた書物——の中に、より潑刺たる興味を多く懐く事によつて其の缺點を補ひ得た。彼にとつて以上の書物は常に教科書でなくして、終局文法上の細かい事よりも更に重要な、本來の思想を記述したものであり、又その思想の注入者となつたのである。』(Life and Work, vol. I, p. 82)

オクスフォードの學校生活はラスキンに及ぼした影響を考察する以前に尙ほその學校生活に就いて數言語る必要がある。

學校内に於けるラスキンの地位が漸次認められて來た事は前に述べた通りである。が又彼の Union に於ける討論は彼が一方の論客であつた事を示すであらう(詳しくは H. T. Cook - The

集は一八四〇—一八四五年に亘るものでラスキンが初期の宗教上の信條の束縛から漸次解放されて行く事を示すと共に、又美術に關する權威として既に認められてゐた事、一八四一—四二年の手紙は Modern Painters の考案に關するものとして貴重な価値を有する事、最後に彼の文體の成熟と獨得の特徴を示すものとして認められてゐる。(Cf. Library edition, vol. I, p. III-IV) 又上記の友人、知己に就いては Praeterita, I, Chap. xl, Christ Church Choir を參照せよ。

一五

既に詩作に於いて其の才能を示せるラスキンはオクスフォードに於いて Sir Roger Newdigate の懸賞詩に参加する事を企てた。一八三七年オクスフォードに移つて間も無く The Gipsy と云ふ課題の下に初めての試作をした。併し此年に於ける賞選者は後の Westminster の Dean である Arthur Penrhyn Stanley であつてラスキンは其の次位を占めた。Frederic Harrison は之れを評して、伶俐なる人間が天才的才能を有す

る人間に打ち勝つ事を示す例證である。 (Frederic Harrison - John Ruskin, p. 35) 第二回の懸賞詩は同三八年 The Exile of St. Helena の題に於いて行はれたがラスキンは再び失敗したが翌年の Salsette and Elephanta に於いて彼は遂に當選の榮を荷ふ事が出来た。

單に詩作は(後に示す様に)彼の進む可き方向でなかつたのみならず殊に此の Newdigate の懸賞詩の努力は彼にとつて極めて無意義のものであつた。Tennyson の言葉の様に懸賞詩は要するに詩とは云へない。其詩は一定の型に填る必要がある。ラスキンの詩に Byron, Shelley 其他の詩人の風がありとは云へ、一定の型にはめて詩作すると云ふ事は彼にとつて極めて困難な事であつた。第一回の懸賞詩 The Gipsies は第三回の當選詩よりも遙かに彼獨特の色彩が強く其の代り定式的に精練されてゐる所はない。彼がオク

スフォードへ赴くに當つてその家庭教師から得た忠告の中に此の懸賞詩の事があつた。而して其の忠告は Pope の風を眞似せよと云ふ事であつた。ラスキンの父も W. H. Harrison (Friendship's Offering の編者)に與へた手紙の中で(三七年四月七日附)ラスキンの詩が以上の意味に於いて到底其の當選を克ち得ない事を認めてゐた。翌三八年のラスキンから父への手紙にはラスキンが如何に其の詩を推敲するに苦心を拂つたかを語つてゐる。第三回の詩はラスキンの父の言葉の如くに『極めて缺點の少ない』ものであつて之れに對して當選の榮譽が與へられた。

ラスキンの成功は College 並びに大學の當局者の注意を惹く事となつた。同年(一八三九年)六月十二日には(オクスフォード記念祭當日)此の當選詩の朗讀が盛大に行はれた。ラスキンの兩親の喜悅は誠に其の頂上に達した。併し事實

此の榮譽は此の機會にラスキンが湖水詩人である Wordsworth に認められたと云ふ事以上に其の價値を有するや否や極めて疑問である。ラスキンは後年この懸賞詩作に多大な時間と努力を費した事を後悔してゐる。自叙傳中にラスキンは此の事に關して全然別の機會に於いて僅か當時の選者であつた Keble と彼の當選詩に就いて言及してゐるに止まつてゐる。(Cf. Praeferia, II, § 193) 併し Cook 氏が此の競争に對するラスキンの後年の述懐として其の評傳に引用せる言葉は、既に羅典、希臘の古典に就いて述べられたるが如く、ラスキン自叙傳の稿本中に發見しうる所にして、此の懸賞詩の勞作を稱して『父

に苦しむと述べてゐる。洵にラスキンは他の多くの著書に於いて述べてゐるが如く、教育法上に於ける競争的精神の弊を痛嘆せる者である。(Library edition, vol. xxxv. Appendix, (Additional passages) Oxford Studies, Prize Poems, pp. 613, 614. Cf. E. T. Cook The - Life of Ruskin, vol. I, Chap. III, § III and the Letter to Rev. W. L. Brown dated 1853, quoted by Cook in the same chapter, § VI.)

教育は上に於ける競争的精神の不可及弊害に就いてラスキンの言は、例へば Fors Clavigera, Letter IX に語られたスズ格蘭一青年の話を参照せよ。此の點に於いてラスキンは各人の天分を信じ其の應分を主張するものである。

しうる所にして、此の懸賞詩の勞作を稱して『父の涙を流さんばかりの悦びと、自分の嗤ふ可く且つ何んとも云ひ様のない自尊心と自慢心』と

併しラスキンの詩作に就いては、茲に其が彼の誤れる方向であつたと云ふ事を指摘するに止めて更に詳細は後に譲るであらう。

に起因するものとし、更に『懸賞によつて其の

オクスフォード時代の彼は學課及び懸賞詩作

以外に多少繪畫及び音樂に就いて、練習する所があつた。音樂に就いては自敘傳中に藝術としての音樂の原理を理解し得た旨を書いている。(I, §§ 202-204. Library edition, vol. xxv. p. 619 [additional passages in the M. S.]) 併し彼自身の旅を進んだ所のものとして、彼の勞作は Kata Phusin の名によつて記憶される。云ふ迄もなほ、これは Introduction to the Poetry of Architecture; or, the Architecture of the Nations of Europe considered in its association with Natural Scenery and National Character. の著者の名である。

オクスフォード在學中ラスキンは其の毎夏、三度内地を旅行した。一八三七年の湖水地方への旅行は大陸旅行より歸來後初めての訪れであり従つて同地方の印象は、大陸、殊に伊太利、瑞西等の印象との間に著しい對照を示した。茲

に於いて彼の腦中に建築論に關する或る考察が浮んで、一八三七年から三八年に掛けてオクスフォードに於いて其の著作に着手した。(旅行に關しては Præterita I, §§ 244-246. 254. Library edition, vol. I. p. xxxvii, note 3. 此の論文に就いては Præterita, I, § 250 参照)

此の論文は當時 London の編輯してゐた Architectural Magazine に一八三七年から三八年に亘つて Kata Phusin の匿名の中に連載された。London に既に Magazine of Natural History の時代からラスキンの寄稿を受けてゐたものであつて上記の論文の掲載せらるゝに及んで彼はラスキンの父に手紙を發して(一八三七年十一月三十日附)ラスキンの才能を褒め更に後世ラスキンの文學的生涯の記録に於いて、彼の著作が初めて公にせられたのは London の Magazine of Natural History であつたと云ふ事が認めら

るゝに至るは極めて名譽であると述べてゐる。(Cf. Cook - The Life, vol. I, p. 38)

に次の如く考へてゐる。

Cook 氏によればラスキンの建築論は、英國に於いて一國民の生活、信仰の記録としての建築の意義を教へた最初の論文であり、此の點に於いて其の所論は誠に科學的基礎を有し、思辨、研究上に新しい道を開いたものである。一八三七、八年代に公にされた彼の建築論も亦狭い範圍ではあるが此の意義を有するものであり更に又十年後 The Seven Lamps of Architecture の中に開陳されてゐる建築原理のあるものを既に此時に於いて握つてゐたと云ふ意味に於いて Seven Lamps, Stones of Venice, The Two Paths の序奏を認めらるべきものである。(Cf. Cook - The Life of Ruskin, vol. I, pp. 83-85)

よつて醜くされ又内容も空虚ではあるが洵に、不思議にもその到達す可き點に正しく到達してゐる、而して既に、人々が直に私に具へられたよろこばしき才能であると認めてくれた文體の巧妙と云ふ點で當時の多くの文學の上に抜き出たものであつた。』(Præterita I, § 250)

此の意味は Cook 氏が其のラスキン傳の冒頭に引用した (vol. I, chap. I, p. 1) ラスキンの述懐『一八八六年といふ時から振返つて一八三七年といふ小川の岸、其處からは私の若い時代の全部を見る事の出来る、その岸を眺むれば、私は自分自身の中に何等變化したものゝないのに氣が附く。私の中にあつたあるものは無つた、あるものは更に強くなつた、私は覺へるに少なうしてで澤山に忘れてしまつた。しかし私の全

體を見るに、私は昔そのまゝの若者でたゞ今では失望とリューマチスになやまされてゐるに過ぎぬ』(Præterita I, s. 246.)と云へる此の述懐と合せて考へられねばならぬ。E. T. Cook氏はラスキンの此の論文に現はれた彼の特色を擧げた後『彼の近世畫家論時代の』ラスキンの殆ど全部は此の初期の諸論文の中に——萌芽し或は縮圖として——現はれてゐる』(vol. I, p. 86.)と云ふのも此の意味に於いてある。

The Poetry of Architecture, or, The Architectural Association with Natural Scenery and Natural Character の表題に就いてラスキンは次の如く云ふ。

『私は將來の半生を費して論せんとする所のものゝ定義を之れ以上より少ない又より含蓄のある言葉で現はし得なかつた』。(Præterita I,

『Kataphusin は詩人の精神と共に美術家の眼と手とを有し、極めて詩的なる論文を連載してゐる』と(一八三九年二月三日の同紙 Cf. Cook — The Life, vol. I, p. 87.)Cook氏は之れを以つてラスキンの筆になる散文の小品中新聞紙に其の論評の現はれたものとしては最初のものであるとしてゐる。之れより後同誌を中心として起る討論は Kataphusin の寄稿を得なければならなかつた。Arthur Parsey との透視畫法上の論戦、W. Scott の記念碑の設計に關する主張等は何づれも Kataphusin の手によつて同誌上を賑はしたものである。

Parsey との論戦(Convergence of Perpendiculars の題名の下に同建築誌四十號(三八年二月號)以下に連載せられた。此の所論は一八五九年に現はれた The Elements of Perspective に就いて極めて豫示的性質を持つてあると考へられてゐる。スコットの記念碑に關する所説は當然此の問題に關して Poetry of Architecture の著者は一方の權威である事を認められて其見を徴されたものであつて全表

S. 250)

又 Kata Phusin の匿名『自然に遵ふて』と云ふ意義に就いては『等しく私が此の問題又は他の問題に就いて論せんとする時の私の氣質を現はしたものである』と。(op. cit.)

Asmore Wingie は此の作品に就いて可なり多くを吾々に語る。其は藝術上の問題に關する彼の將來の著作に對する鍵鑰たるのみならず又彼の所論の缺陷と力とを併せ示すものである。彼は其の書中に建築上の教義と修辭學的美との二つの見地から可なり長い引用を載せてゐる。(Cf. Life of John Ruskin, pp. 30-35)

此の建築雜誌上の論文は其の該博なる古典的知識からしてオクスフォードの don の手に成つたものと考へられてゐた。當時のタイムズ紙は同紙の中から最も秀れたるものとしてラスキンの論文を擧げ之れに論評を下して曰く

題は次の如く極めて長いものである。
Whether Works of Art may, with propriety, be combined with the Sublimity of Nature; and what would be the most appropriate situation for the Proposed Monument to the Memory of Sir Walter Scott, in Edinburgh:
其の外にラスキンの印象派の見解を示すものとして觀察されてゐる The Proper Shapes of Pictures and Engravings, 此の時代に關する作品である。是等の論文に就いて詳細は Library edition, vol. I, Part III. 参照)

一七

既に述べた様に是等の諸作は、纏てラスキンが彼獨得の手段として採るに至つた文體を早くも支配し得てゐた事を示すものであるが、要するにオクスフォード時代並びに其の以前の文筆的努力は主として詩作に傾注されてゐたものと見る事が出来る。(Cf. Library edition, vol. II, p. xviii)ラスキンの初期の文筆的努力の利益は、勿論詩作の場合に於いては彼の述懐の如く極めて無意義なる勞力の浪費であつたが、然も亦彼

の認めるが如く、ラスキンをして、後に語らんと欲するに至らしめるや、既に其の思想を表現すべき手段を用意 おかした點にある。(Library edition, vol. I, p. liv. vol. III, p. xx. Cook — The Life of Ruskin, vol. I, p. 106) 又オクスフォード時代の詩は單に懸賞詩作に止まるのではない。ラスキンは彼が散文詩人として眞の名聲を擧げるに到つた一八四三年以前に於いて、既に詩人として誤つた路に出發してゐたのである。(Cf. Cook — The Life of Ruskin, vol. I, p. 89) Ada Earland は Newdigate の懸賞詩を以つてラスキンの若き詩才の希望が充され且つ又其はラスキンの詩人としての發程に非ずして寧ろ最後であつた事を祝福してゐる (Ruskin and his circle, p. 44) 彼の詩作は一八四三年 Modern Painters の第一卷の發刊後で多少なされたが大體に於いて一八四五年の頃を以つて終つて

ある。(Præterita II, § 109. and Library edition, vol. II, p. xxx) 併し最も華々しき努力を見せたのは此のオクスフォード時代と其の少し前であらう。以下彼の詩作の一般と其れに對して主要な關係を持つてゐる戀愛とに就いて語りた。傳記々者はラスキンの詩に二重の意義を認める事が出来る、其は彼の詩が詩としての文學的價值と又彼の才能や性格なぞの發展を示す好箇の自敘傳的意義を(殊に幼時の詩に於いて)有する爲めである。(Cf. Library edition, vol. II, p. xvii) 少年の眼や心に映じた自然の風物が如何にして詩となつたかは前にラスキンの幼年時代を語る時に簡單にのべておいた。ラスキンの父は殊に此のラスキンの極めて早熟な才能を認めて彼の將來に對して明るい希望を投げ懸けてゐた (Cf. Cook — The Life of Ruskin, vol. I, p. 28 and seq. Library edition, vol. II, p. xviii, xxxiii

and seq.) 一八三六年はラスキンの詩作上の一大轉機であつた(Library edition, vol. II, p. 449, note) 彼の詩には華かな又苦悶の多、愛の詩が加へられた。一八三七年から三九年の間には此の愛の詩に Newdigate の懸賞詩や、Herodotus に對する強い興味から生れた詩作 (Cf. Library edition, vol. II, p. xxiii) 此の詩は彼が戀の悶えから逃れん爲めに作つたものである) が加へられた。此の時代は正にラスキンの詩人としての名譽の最高頂であつた。彼は當時の人氣のある Album poet の一人であつて J. R. of Christ Church, Oxford の寄稿した詩をのせたものが無ければ婦人の部屋に備へつけの雜書は不完全なものとなつて考へられてゐた。(Cf. Cook — The Life of Ruskin, vol. I, p. 91-100)

註 ラスキンの詩を寄稿した雜誌は主として前に述べた Pringle (後には Harrison) の編輯してゐた Friendship's Offering である、彼が之れに寄つた詩片は二十七の多きに

達してゐる。此の雜誌との交渉は前にのべた様に Croyden の従兄 Charles を通じたものである。此事はラスキンの極めて多數の詩作を促した 原因として考へられてゐる Cf. Cook — The Life, vol. I, p. 90)

併し一八四〇年以降の詩は極めて以上の詩と異つた傾向を示してゐて最早戀愛詩はなくなつた自然の眞美を歌つたものがあつ、此の點に於いて幼時の詩作と相類似してゐる、勿論その觀察、啓示に於いて到底兩者は比すべくもないが。(Library edition, vol. II, p. xxvii-xxviii) 而して是等の詩はラスキンの傑作と考へられてゐるが其は纏て彼本來の進路であつた散文體に路を譲ると共に彼の詩作は其文筆的勞作から全く影を没するに至つた。ラスキン自から一八四五年伊太利から父へ宛た手紙で詩作を爲し得ざる旨説してゐる。一八四六年にラスキンの父は Venice から W. H. Harrison に手紙を出してラスキンが最早一行の詩も書かない事を歎じてゐる。

(Cf. Cook—The Life, vol. I, pp. 90, 98) 此の二人の友達(ジョン・ジェームズとハリソンと)は共にラスキンが詩作を放棄してしまつた事に就いて悲んでゐた。一八五〇年にラスキンの父の手で編輯された詩集は此の悲しみの結果、子の詩才に對する過去の懷出として家の記録にと數部を自費で印刷したものである。併し終局ラスキンの撰擇が正しとせらるゝ事となつたのは明かである。

茲に於いて筆者は再びラスキンの戀物語を傳へて其の結末を附けなければならぬ。一八三六年の初めに佛蘭西から父の組合者の娘達が Herne Hill に六月ばかり滞在してゐた間にラスキンが其の中の一人 Adèle Clotilde を戀するに至つた事は前節に述べた。此の戀の告白はラスキンの自敘傳では比較的軽く取り扱はれてゐるが一般に極めて切なるものがあつたと解せら

八三八のラスキンの多方面の仕事を以つて彼を戀の恐るべき結末より救ひ得たものと認めてゐる。(Life of John Ruskin, p. 38) 一八三八年の初めに彼が On the Relative Dignities of Music and Painting の一論文を書き與へた(Cf. Præterita I, §§ 247-248) Charlotte Withers と云ふ娘との交渉も彼に悲しき記憶こそ與ふれ、同年を秋の Adèle との再會——此の點に關してラスキンの母はラスキンの運命に對して重大なる試みを爲したと云へるが(Ada Farland, op. cit., p. 42)——さへなかつたならばラスキンの將來は、或は無事に兩親の希望してゐた方向に進んでゐたかも知れない。此の機會に於いても Adèle の心はラスキンの方に向けられなかつた(Cf. Præterita, I, §§ 254-256) 一八三九年彼女は遂に佛國の紳士との間に婚約を結んだ。併しラスキンの心を破るのを懼れて此の事は當分秘められてゐた、

れてゐる。(Ashmore Wingate は自敘傳の告白を稱して沈黙は言葉以上を語ると見做してゐる。ラスキン傳三六頁參照又自敘傳第一卷第五〇節の最後の章句は此の點に關して何等かの意味を持つてゐるであらう) 此時の感情は一八三六年の愛の詩となつて現はれた(此の詩こそラスキンの當時の心情を語る本當のものであらう)更に三七年にも彼女を歌つた詩が極めて多數である。(此頃の詩には多少 Shelley の風がありとされるのは一八三六年ラスキンは Shelley を讀んでゐた事を自敘傳中に語つてゐる、第一卷、二一〇節、——ラスキンの愛の詩に就いては Literary edition, vol. II, p. xxi を參照せよ) 併し彼自身の云ふ通り(自敘傳第一卷二三七節)又 Ada Farland の所言の如く、オクスフォードの新生活は彼の戀々の情を静め得たものに相違ない(Cf. Ruskin and his circle, p. 41 Wingate は)

そして彼の心を轉換させ様として Miss Wardell と云ふ娘との接近が計られたが(Cf. Præterita, I, §§ 257-259) ラスキンは別に彼女に惹かれる事になつた。一八三九年の降誕祭に Adèle は再び Herne Hill に訪れた。此の時に彼が彼女の婚約の事を知つてゐたか否かは不明である。同年十二月に書かれた Farewell の詩は Shelley の風を持つてゐるが最も傑作とされてゐる。一八四〇年三月遂に彼等は結婚した。一八四一年の Friendship's Offering に載せられた Agonia は彼女に對する最後の詩である。

ラスキンの戀は斯して破れた。(Cf. Præterita, II, § 16) 彼の失望は極めて大であつたらう、併し此の失戀のみが彼の後世を暗くした不幸と沈鬱との原因であると考へる事に對しては Ada Farland の否定的見解の方が妥當と思はれる。(Cf. Ruskin and his circle, p. 34 ラスキン自身

の見解に就いては *Præterita*, I, § 255 参照又ラスキンの運勢と此の戀物語の關係に就いて興味ある記録を吾々は *Library edition*, vol. xxxv [*Præterita*], p. 298 の脚註に見出しうる)

是れより先、一八四〇二月八日を以てラスキンは丁年に達した、彼は其の責任を自叙傳第二卷十三節で述べてゐる。Collingwood によれば此時は彼を知る者に彼の洋々たる前途の幸福を思はせるものがあつた。學校の卒業も間近く然も彼の文才は既に聞えてゐる。唯缺けてゐるのは彼の失戀であつたが *Adèle* は此時には未だ結婚してゐなかつた。此年から彼の父は彼に年二百磅の小遣錢を與へる事になつた、ラスキンは之れを以つて直に Turner の “*Harlech Castle*” の畫を買つて了つて比較的節儉な父親に *Prodigal Son* だん云ふ淡い印象を與へて了つた。(Cf. *Præterita*, II, §§ 14-15) 併し之れを機會に

ラスキンは初めて Turner を會見し得た。(Cf. *Præterita* II, § 66)

併し戀に破れた後のラスキンの過度の勉強はその精神上の打撃と相俟て彼の體力に悲しむ可き影響を與へた (Cf. *Præterita* II, §§ 16, 17) 一八四〇年五月彼は遂に肺を侵されて吐血した。過ぐる二月の華かなりし希望は三ヶ月を経ぬ間に悽慘な絶望と變じて了つた。讀書は禁せられ學業の繼續は勿論中斷された。父親はラスキンの上に懸けてゐたあらゆる光明を奪れてしまつて全く落膽してゐたが子の生命を氣遣ふ情に切な彼は其の失望を言葉に現はす事はなかつた。(Cf. *Præterita* II, §§ 17, 18) 同年ラスキン一家はジョンの健康を養ふ可く南伊太利の暖かい地方へと旅行する事になつた。

斯してラスキンは最早兩親の希望してゐた宗教界の權威者としていなく、彼の觀察したる所

のものが果して何を語るかを正しく人々に告げ知らせる使命を持つた指導者として吾々の前に現はれる事となつた (Cf. *Library edition*, vol. I, p. xxxix. M. Mather—John Ruskin, *His Life and Teaching*, p. 45) 此の意味に於いて一八四〇年の二月から五月迄の間に起つた變化は極めて重大なものである。一八四二年彼は再びオクスフォードに戻つて其の學業を完成した。しかし一八四〇年以後は彼の新しき使命への發足として語られるのである。唯、其れを語る前に今一つ残されたもの即ちオクスフォードの彼に及ぼした利害に就いて諸家の見解を窺つて見よう。

ラスキン自身は Frode の間に答へて彼自身の關係する範圍では、オクスフォードに於ける彼の精神は莢になる前に潰されて了つた云々つた様なものだと述べてゐる (Cf. *Præterita* II, § 19)

Cook 氏も此の見解をとつてオクスフォードは彼の教育上何等決定的の役目を演せず且つ何等彼の心胸に啓示を與へてゐない、美の魅力はオクスフォード以前のラスキンの心胸に堅く刻されてゐたものであるからして、學校生活は他の人々の場合の様にラスキンにとつて後の人格を決定する機會とはなり得なかつた。又オクスフォードに於ける彼の努力は彼の氣質に反するものか然らざれば誤りたる彼の文才の發展であつた。一八四三年彼は「オクスフォード卒業生」の名の下にその名聲を高めたが彼が事實卒業したのはオクスフォードの學業そのものではなくして寧ろ、丘や雲や、樹林や蘚苔の間に於ける他の方面の研究に於いて卒業したのである。(Cf. Cook—*The Life of Ruskin*, vol. I, pp. 64, 82.)

Collingwood はラスキンの交友が彼に及ぼし

た利益を述べた後で此の交友が無かつたとして
もオクスフォードの生活はラスキンに利益を興
へたであらうとなして、然らざれば彼は

『美術に於ける獨學のディレッタント、社會の
ブルジョワ的改革論者として彼は、彼が最高か
ら最低に互る諸階級の人々と交はる事により、
又あらゆる趣味を鑑識しあらゆる主張を吟味し
あらゆる理想を比較する事等によつて得た、觀
察の廣大、表現の自由を得る事が出来なかつた
かも知れない』と結論してゐる(Life and Work
of John Ruskin, vol. I, p. 81)

Frederic Harrison はオクスフォードの生活が
ラスキンに一部の興味を興へた事は認めうるが
併し

『當時の課目、Newdigate の懸賞、ラテン語の
散文、希臘語の文章論、等は重大なる機に於いて
ラスキンの自然的傾向から彼を引き離し、彼の

戀愛と共に彼の最も貴重なる年の幾分かを浪費
せしめた。ラスキンは如何なる場合にも彼の印
象に於いて雜多であり、彼の熱誠に於いて散漫
である様にされて來た。若し彼が他の學位や名
譽の仕事を避けて、自己特有の仕事並びにその
知己を求め得たならば、或は彼の愛せる兩親が
最高の名譽を得て、終に教會の赫赫たる僧正職
に開花す可き事を期待してゐなかつたならば、
恐らくオクスフォードは純然たる利益ある學校
となつたであらう』と(John Ruskin, p. 37.)

(未完)

チュードル。スチュアート

兩朝に於ける工業政策(二)

高木 壽 一

三

茲に先づゾムバルトが述べたる所のマーカン
チリズム概論並に商工業政策觀を記すことゝす
る。

吾人は、何物が思想並に根本原則に就て、前
時代即都市經濟時代より繼承せられ、各君主の
異なる利害により如何なる變化が必要に應じて
生ぜざるべからざりしかを明ならしめたる時、
最もよく、マーカンチリズム經濟政策の共通的
特質を理解し得るのである。

マーカンチリズムは實に大なる領域に擴張せ
られたる都市の經濟政策に他ならない。都市が

其利害に從て世界の中心點を形成したるが如く
今やそは君主によつて支配せられたる領土とな

れるも其政策は其根本觀念に於て依然、自利的
である。舊社會觀念も亦一般的國家觀念に於て
極めて徹底的に存続した即全部の幸福は個人的
幸福に先行し、總員は假令、專制君主を通じて代
表せらるるも尙協同的關係に立つものである。

斯る根本觀念より先づ專制君主國家の其臣民の
經濟的消費に對する廣きに亘れる考慮(Fursor-
ing)が生ずる。即中世都市の備荒政策は國家に
よつて其總べての部分に於て誠心誠意を以て繼
續遂行せられた。(Der Moderne Kapitalismus,
I Band S. 363) 斯くて茲に、一個の經濟主體は

財貨を生産し或は商業を營む彼の權利を其團體
(Gemeinschaft) に得るとの原則を更に生せしむ
る。即今や國王によりて代表せらるる其團體は
其判斷により、自己の利害に於て適當なりと認